

今週の為替相場見通し(2023年9月25日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		147.32 ~ 148.46	148.39	147.00 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		1.0615 ~ 1.0737	1.0645	1.0500 ~ 1.0750
(1ユーロ=)	(円)		157.05 ~ 158.43	157.94	155.00 ~ 159.00
英ポンド	(ドル)		1.2231 ~ 1.2425	1.2245	1.2000 ~ 1.2500
(1英ポンド=)	(円)	*	180.84 ~ 183.49	181.65	180.00 ~ 185.00
豪ドル	(ドル)		0.6386 ~ 0.6510	0.6441	0.6380 ~ 0.6530
(1豪ドル=)	(円)	*	94.54 ~ 96.07	95.58	94.90 ~ 96.40

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 岩下 義明

(1)今週の予想レンジ: 147.00 ~ 150.00 円

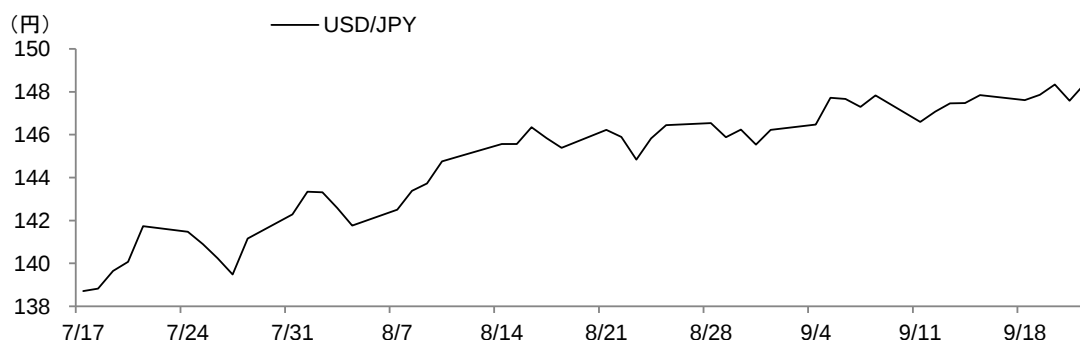
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は現状維持の日銀金融政策会合を受け円安基調へ。18日、ドル/円は147.86円でスタート。東京時間は東京休場で参加者も少なく、週後半の材料待ちで動意に欠け、147.70円を挟んだ狭いレンジで小動き。19日、予想対比強い加8月CPIにより米金利が上昇しドルが買われて147.92円を付けた。20日、東京早朝にイエレン米財務長官から本邦為替介入を容認するような発言と、神田財務官からの「過度な変動は好ましくない」との発言を受けて一時的に円買いが進んだものの、値幅は出ず147.76円でスタート。ロンドン時間以降は弱い英8月CPIとFOMCハト派化期待の金利低下が相まってFOMC直前には147.48円まで下落。FOMCでは2024年末の政策金利が上方修正されたこと、パウエルFRB議長のハト派化期待をプッシュバックするような会見による米短期金利上昇に合わせてドル買いが進み、148.36円を上値を伸ばし148.34円でクローズ。21日、東京は前日米国時間のドル買いの流れが続き、前日の年初来高値をさらに更新し148.46円まで上昇。ロンドン時間以降はFOMC後の買いが一巡し、米短期金利低下に合わせてドルが売られ、一時147.32円を付ける。22日、東京時間はBOJでは金融政策の現状維持が発表され、ドル買いで反応し148.16円を付ける。その後は植田日銀総裁の記者会見で市場の早期マイナス金利解除の思惑を打ち消すと円がさらに売られ148.42円まで上昇。ロンドン時間以降は今週の主要な材料を消化しきったことから再び同意に乏しい展開となり、148.39円でクローズ。

今週のドル/円は堅調な展開を予想。為替当局者の発言としては為替介入までの距離が今一步あるように感じられ、すぐに介入が入るとは考えにくい。とはいえ既に昨年一回目の為替介入の水準は超えており、今後も介入が意識されつつじわじわと底値を切り上げながらドル買いが進む展開になるか。月末週であることからリバランスなどのフロー要因により一時的にドル売り地合になる可能性もあるものの、ドル売りが継続する明確な材料がない中単なる押し目買いポイントにしかならず再びドル買い基調に戻りやすいと思われる。今週の主な経済指標としては、26日(火)に米9月消費者信頼感、28日(木)に米4~6月期GDP(3次速報)、29日(金)に米9月ミシガン大学消費者マインド(確報)が発表される。また、27日(水)にはBOJの7月議事要旨が公表される。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/18~9/22)の値動き: 安値 147.32 円 高値 148.46 円 終値 148.39 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 部坂 洋太朗

(1) 今週の予想レンジ: 1.0500 ~ 1.0750 155.00 ~ 159.00 円

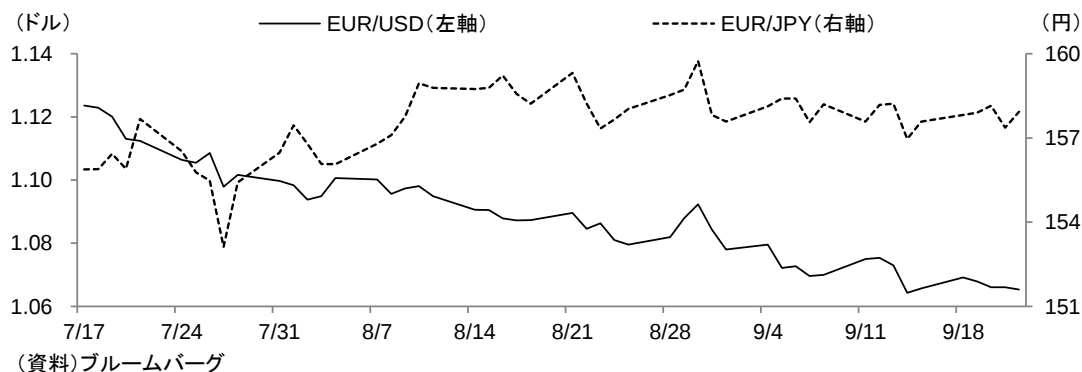
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、週前半にユーロ買いの流れから上昇するも週後半にかけて米金利上昇を背景に小幅の下落となった。週初18日、1.0669でオープンしたユーロ/ドルはEBCが量的引き締めを加速させるとのヘッドラインから1.0690台まで上昇。19日、ユーロ/ドルは前日からのユーロの買い戻しの流れが続き、1.0718まで上昇するも、米金利上昇を背景に再び1.0679まで下落となった。20日、ユーロ/ドルは欧州株高や米金利低下する動きにより一時は週高値となる1.0737まで上昇。その後、FOMCがタカ派な内容だったことを受けてドル買いの展開となり1.0660まで急落となった。21日は前日のドル買いの流れが継続となり、一時は約6か月ぶりの水準となる1.0617まで下落となったが、ECB高官による追加利上げの可能性を示唆する発言を受けて1.0660まで反転上昇となった。週末22日は、ユーロ圏9月製造業PMIの結果が事前予想を下回る結果となりじりじりとユーロが売られる展開となったが引けにかけて買い戻され、結局 1.0645で越週した。

今週のユーロは引き続き上値の重い展開を予想する。先週発表されたユーロ圏9月製造業/サービス業PMIはともに節目である50を割り込んでおり、ドイツおよびフランスを中心とする欧州の景気後退懸念が強まるとともにユーロも軟調に推移した。ユーロ/ドルは7月前半に付けた1.1276を高値に下落トレンドが継続しており、引き続きユーロに下落圧力がかかりやすい状況と見られる。また、先週開催されたFOMCでのパウエルFRB総裁によるタカ派な発言や、2024年における政策金利見通しのドットチャート上方修正等の内容を踏まえると、米国でのインフレに対する警戒感は根強く、ユーロ/ドルは上値の重い展開が継続か。今週の主な経済指標として、29日(金)にユーロ圏9月消費者物価指数(HICP、速報)の発表が予定されており、8月に引き続き総合ベースおよびコアベースで前年比減速するか注目。また、同日29日(金)にラガルドECB総裁によるパリでの講演も予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/18~9/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.0615 高値 1.0737 終値 1.0645
(対円) 安値 157.05 高値 158.43 終値 157.94



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2500 180.00 ~ 185.00 円

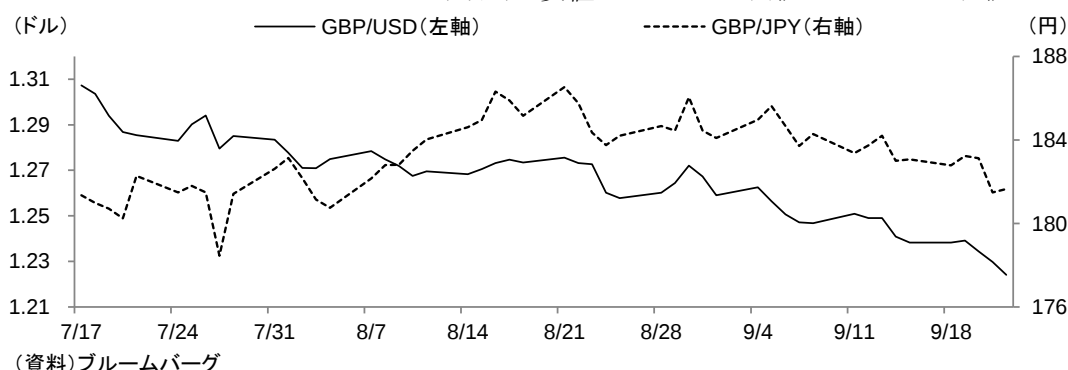
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで1%強、続落。20日の米国連邦準備制度理事会(FOMC)は政策金利を据え置く一方で、年内の追加利上げの可能性を示唆するなど「タカ派的据え置き」の印象が強く、ドルが幅広い通貨に対して上昇した一方、21日のイングランド銀行(BOE)の金融政策発表では追加利上げを見込む市場予想に反して、政策金利の据え置きが発表され、ポンドが下落した。その後、いったんBOEの政策金利発表前の水準までポンドは反発したものの、翌日22日に発表された英8月小売売上高、英9月サービス業PMI(速報値)の結果は市場予想を下回り、景気後退のリスクが意識されるなかでポンドには再び下落圧力がかかっている。対円では対ドルに比べて下落率の大きさは小さかったものの、それでも183円前後からいったん181円を割り込むところまで下落している。日本銀行の金融緩和長期化観測の高まりを受けて円安・ドル高が進んだものの、それ以上にBOEの据え置きのインパクトがマーケットにとって大きかったということであろう。改めてBOEの9月会合について振り返ると、利上げ見送りがぎりぎりの判断であったことが伺われる。投票権を持つ9人のうち、ベイリーBOE総裁を含む5人が利上げ見送りに賛成したが、4人が+0.25%の利上げが必要として反対していた。前日20日に発表された英8月消費者物価指数は前年同月比+6.7%と7月分の同+6.8%から低下、1年半ぶりの低水準となったことが利上げ見送りの決定打となっただろう。市場では同+7.0%への再加速が見込まれていた。ベイリーBOE総裁は「インフレ率の大幅な下落が今後も続くだろう」とコメントしており、今後の利上げの可能性は低いとの解釈が広がった。一方、BOEの政策発表は一辺倒というわけではない。量的引き締め(QT)による保有国債の年間削減目標は、23年10月から24年9月に償還と市場売却を合わせて1000億ポンドと、23年9月までの800億ポンドから引き上げた。さらに、ベイリー総裁は利下げに関する議論は「時期尚早」としている。

今週1週間のポンド相場も上値の重い展開が続くだろう。BOEの利上げ停止という見方が広がるなかで、既に来年半ばの利下げの可能性も意識されつつある。BOEの金融政策発表の翌日に発表された経済指標が英国の景気後退リスクを示唆するものであったことも気がかりである。英8月小売売上高は前年同月比▲1.4%と市場予想の▲1.2%を下回ったほか、英9月サービス業PMI(速報値)は47.2と8月の48.6から低下し、市場予想の48.7を大幅に下回った。特に雇用のサブインデックスが50.5から46.4へと大幅に低下している。なおも堅調を維持する米国の経済・雇用情勢と比較して、やはり英国景気の勢いの鈍化は鮮明である。米英日と金融政策発表が相次いだ先週と比較して、今週発表される経済指標は小粒の印象が強く、目立ったイベントも少ないが、29日(金)の米8月コアPCEは為替市場に影響を及ぼす可能性があるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/18~9/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.2231 高値 1.2425 終値 1.2245
(対円) 安値 180.84 高値 183.49 終値 181.65



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6380 ~ 0.6530 94.90 ~ 96.40 円

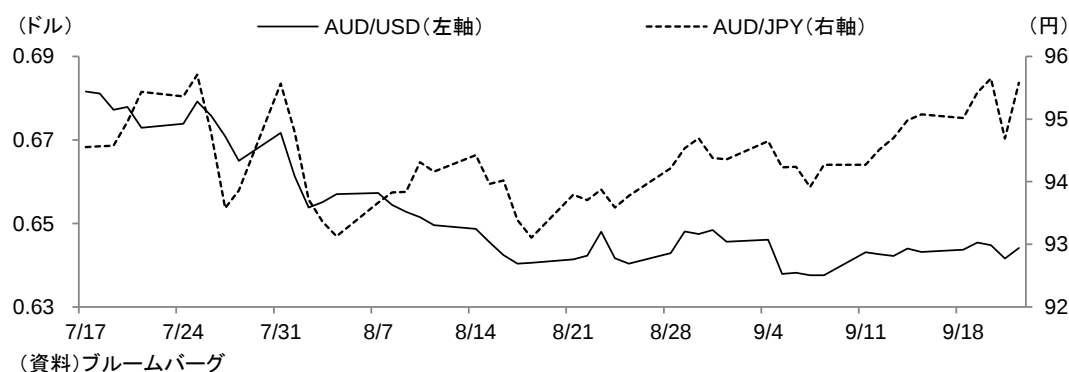
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.64を挟んで上下に振幅。18日、東京休場に加えて注目される指標の発表もない中、日米英中銀会合を控えて終日様子見相場が続いた。0.64台前半の狭いレンジで終日推移。19日、この日発表されたRBA議事要旨では9月理事会で+25bp利上げも検討されたが、引き締めサイクルの効果がまだ表れていないリスクの方を重視すべきという結論に至り、金利据え置きを決定したことが判明。ただし、この発表を受けた相場への影響は限定的であった。ロンドンオープン後に買いフローが持ち込まれ一時0.6473近辺まで上昇したが、米債利回り上昇を背景にドル高が進行すると豪ドルは小幅売り戻されて0.6450近辺で引けた。20日、ロンドンオープン後から米金利が低下する流れを背景にドル売りが膨らみ、豪ドルは一時0.6510まで上昇。注目されたFOMCでは政策金利の据え置きを決定。同時に発表されたドットチャートでは24年末、25年末のFF金利見通しが上方修正された。又、パウエルFRB議長の記者会見でも、年内追加利上げの可能性を示唆する内容であったことから、「タカ派的な金利据え置き」ととらえられて、米国債利回りは大きく上昇しドル高が進行。豪ドルは売りで反応し0.6450近辺まで低下した。21日、FEDによる利上げ継続観測の強まりを受けて株価が軟調な中、豪ドルは頭を押さえられ週安値0.6386まで下落。22日、日銀金融政策会合では緩和政策の維持が決定されると共に、フォワードガイダンスの文言も変更無く、円全面安の展開に。豪ドル/円が95.80円近辺まで上昇する中、豪ドルは0.6465まで買い進まれた。NY市場時間にかけて株価が下落幅を拡大すると、豪ドルは小幅売り戻されて0.6440近辺で越週。

今週の豪ドルは豪8月CPIインディケーターの結果次第で大きく振れよう。今週は27日(水)豪8月CPIインディケーター、28日(木)豪8月求人数、豪8月小売売上高、米4~6月期GDPなどが注目材料。豪8月CPIインディケーターは原油価格の上昇などを背景に前月よりも上昇することが見込まれている。ただ、8月のCPIは過去の傾向から下振れる可能性があり、どのような着地となるかは若干不透明。足許3会合連続で政策金利の据え置きを決定しているが、次回会合で利上げ再開を惹起させるような結果となるのかどうか注目される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/18~9/22)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。